

社会的迷惑行為と社会を考慮すること

斎 藤 和 志

I. 問題の所在

従来、エチケット、マナー、公衆道徳、といったような言葉が意味していた社会規範の根底には、「他人には迷惑をかけない」ということが社会生活には不可欠であるとの認識が存在していたと考えられる。しかしながら、一向に減少しない迷惑駐車や喫煙などの問題に加えて、学校や職場でのセクシャル・ハラスメント、近年急激な普及を見せた携帯電話の公共の場での利用の仕方など、新たなストレス要因が増えているとさえいえよう。

吉田（1998）は、このような「社会的迷惑行為」が増加している背景には次のような2つの理由の可能性があると述べている。第一にあげられるのは、共同体社会の崩壊と生活空間の拡大により、相互監視システムが機能しなくなったことである。つまり、顔見知りを中心の社会では、社会規範からの逸脱行動は必然的に抑制されていたのである。第二に、情報化社会への移行により、価値観の多様化が進み、個人の価値判断が優先される社会になったことである。しかし、その価値判断のルールを決める社会的コンセンサスは形成されていない。前者は、共通の社会規範は存在するが、それが簡単に守られるような社会でなくなっているという立場であり、後者は、新しい共通の社会規範は存在しないという立場になる。実際には、両者が混在していると考えた方が、自然であろう。

私たちは、迷惑な行為に遭遇すると「時代が変わった」とか「社会が変化した」、または「異なる世代が出現した」とか「住む世界が違う」といった表現で諦めているかのようにさえ思える。しかしながら、現実と同じ社会で生活を営んでいるのであり、できれば快適に共生することが望ましいのである。こうした問題を「社会的迷惑」という観点でとらえ、その特徴、生起プロセス、規定要因を検討し、さらに「迷惑」を低減する方策を考えることが重要である。

1. 社会的迷惑とは

「迷惑」とか「社会的迷惑」といった言葉を定義することなく用いてきたが、その点について少し考えてみたい。ここでは、暫定的に、「社会的迷惑」とは行為者が自己の欲求充足

を第一に考えることによって、結果として他者に不快な感情を生起させること、またはその行為と定義しておこう。他者に対して不快な感情もしくは被害を与えることを目的とした攻撃や、反社会的な犯罪も、ある意味では「社会的迷惑」と呼んでもよいかもしれない。しかし、ここで問題とする現象は、少なくとも行為者自身は、その反社会性を明確に意識していないという点が、いわゆる反社会的行為一般と区別されるべき点だといえよう（安藤ほか、1998）。

また、社会的ジレンマと呼ばれる状況は「全員が協力すれば結局はみなが得をするのにそうできない」という点に根本問題があり、社会的迷惑とは区別される。さらに、「社会的ジレンマの場合にはその解決がすべての人々にとって望ましいものであるのに対して、社会的迷惑の場合にはその解決が特定の人々にとっては望ましくない」のである（山岸、1990）。

先の暫定的な定義では、行為者側の特徴として、「他者に対して危害を加える、または不快感を与えること」以外の欲求を充足させることを第一に考えているという点をあげることができる。その結果として、ある他者が不快な感情を生起させるのである。さらに、行為者側からみた場合を考えてみると、「社会的迷惑行為」が他者に対して不快感を与えることを（実際に予期しているかどうかは別にして）予期可能な場合と、予期していない場合があると考えられる。

たとえば、他者の不快感を予期している場合の典型例は、営業を優先することを意識して「違法駐車」や「迷惑駐車」を行う場合などをあげることができよう。また、予期可能ではあるが、意識していない場合もある。明らかに特定の家に迷惑をかけるような駐車を「ついしてしまう」というのは、「意識していない」というよりは「意図していない」と表現した方が適切かもしれないが、明らかに迷惑行為である。罪悪感を感じながらも自己の利益を優先している場合や注意されるとその迷惑行為に気づくような場合があるであろう。さらに、「少しくらいの駐車なら迷惑にならない」と思っで行う駐車が、非常に迷惑な場合がある。また、「迷惑だ」といわれても「なぜ迷惑か」ということが想像できない場合がある。時には、その迷惑行為を「注意（指摘）する他者」に対して不快感を表す場合さえあるであろう。

ここまでの「迷惑」に関する考察は、どちらかといえば行為者の側からみた特徴を検討したものである。しかしながら、「社会的迷惑」という現象を考えていく場合には、認知者側からの検討も不可欠である。極端な場合をあげてみると、「私が不快に思うことは社会的に迷惑である」といった表現はここでは妥当なものとはいえないのである。ある種の行為は、大多数の人々によって迷惑だと認知されており、その場合は「ある種の行為＝迷惑」の図式が成り立っているかもしれない。しかし、別の行為は、A（集団）にとっては迷惑とは認知されないがB（集団）にとっては迷惑だと認知されるのである。こうした行為は他者（B 集団）から「不快」や「迷惑」を表明されても、行為者（A 集団）にはその理由がわからないという現象を引き起こすと考えられる。そうした行為は、特に対処方略が不明確という意味をもち、ストレスを与えるものだと考えられる。したがって、安藤ら（1998）や森ら

(1998)の迷惑認知に関する研究は、こうした問題の明確化に手がかりを与えるものであろう。

2. 社会考慮とは

では、こうした「社会的迷惑」を減少させるには、どのようなアプローチがあるのであろうか。従来の心理学の知見からは、いくつかの可能性を指摘することができる。たとえば、「共感性」や「社会的スキル」のトレーニングはその解決の可能性を示唆していると考えられるし、「道徳性発達」のプロセス、メカニズムの解明はこうした問題に大きく貢献するであろう。しかしながら、こうしたアプローチは、社会全体の規範が共有されていることが前提になっていたり、ある種の知識としての「迷惑」が存在していることを仮定していると考えられる。そこで、ここでは新しい1つのアプローチの可能性として「社会について考えること＝社会考慮」という考え方を提案するものである。前述の「社会的迷惑」に関する考察もまだ不十分であり、これから示す「社会考慮」についての概念も不十分なものであるが、1つの試みとして位置づけていきたい。「社会考慮」とは、個人の生活空間を「社会」として意識している程度、または複数の個人からなる社会というものを考えようとする態度のことである。社会を考慮していない人は、個人の生活を優先し、極端な場合は利己的基準にしたがった行動をとると考えられる。他者との葛藤に対しても、他者への配慮や共感的理解を示すことは少なく、個人主義的というよりは利己的な判断基準が採用される。しかしながら、こうした利己的意識のみの場合は極端な例であって、多くの場合は、自己を中心とした少数者の社会のみが考慮されることになるであろう。「私たち」や「われわれ」と表現されるような範囲の人々の生活のみに配慮し、それ以外の他者に対しての関心が低く、相互依存的な関係にあるという認識が欠如している場合である。

それに対して、社会を考慮しているということは、何らかの形で「社会」を意識していることになる。「社会」というものを考えたり、「社会を構成するものとしての個人」を考慮することである。そのような「社会」は、自己を含む複数の個人が相互に影響しあうような状況であり、そうした他者及び社会に対する関心が高く、ある種の「社会認識」をもっていると考えられる。社会を考慮していない人の行動や認知の基準が自己及び自己を含む少数の身近な他者であるのに対して、社会を考慮している場合はその基準が多様であると考えられる。すなわち、社会を考慮している人は、その社会に対する理解の仕方が多様であり、どのような社会を理想とするかといった価値意識にも多様性が反映され、行動や認知判断の多様な基準が存在することになる。

こうした「社会考慮」といった概念を想定するによって、「社会的迷惑」以外のさまざまな社会的態度に関する問題に対しても貢献できると考えられる。また、「社会的迷惑」のような問題に対する教育的な関与の方針も、従来のものとは異なってくると考えられる。すなわち、特定の技能、知識、(判断)基準を獲得することではなく、「社会というものを意識し、

考えること」が重要になってくるであろう。

3. 社会考慮と社会的迷惑

「社会的迷惑」と「社会考慮」との関連性を考えた場合に、どのようなことが予想できるのであろうか。まず、迷惑認知の観点から考えてみよう。ある種の行為が迷惑だと認知されるのは、不快感情の生起が必要となるが、加えて、それが「迷惑」だと判断される必要がある。その判断が他者と共有できていない場合もあるかもしれないが、少なくとも迷惑を認知している人は「自分だけではない」という認識をもっているであろう。社会を考慮するということの1側面には、「社会を構成する他者」に対する関心も含まれると考えられるので、迷惑だと認知する基準が「自分以外の他者の場合はどうか」といった範囲まで拡大すると考えられる。さらに、「社会システムや社会全体のことを考える」といった側面をも考慮すると、ある個人が直接的には不快感情を生起しないような行為に対しても、社会的には迷惑だと判断すると予想される。たとえば、「電車のただ乗り」のように、直接的には「自分とは無関係」といった判断から、利用者負担の運賃体系や公共交通としての役割などを考えたときに、迷惑だと認知する可能性が出てくる。したがって、社会を考慮している人は、考慮しない人に比べて、迷惑だと感じるような状況が多いと考えられる。

次に、迷惑行為に対する対処法について考えてみよう。先にも述べたように、「社会を考慮すること」は、必ずしも1つの理想的社会を思い描くことではない。ある状況では、ルールの必要性を唱えるであろうし、別の場合は相互配慮を重視するかもしれない。社会を考慮した場合に形成される社会認識については、現時点では明確に述べることができないが、「規制社会」や「共生社会」といったものを想定できると考えられる。そうした社会認識については、さらに検討していく必要があると考えられるが、少なくとも、何らかの形で迷惑対処を志向すると予想される。逆に言えば、社会を考慮していない人は、ある種の行為を迷惑だと思わずに問題視しなかったり、人任せな対処を志向するのではないだろうか。

Ⅱ. 調査データによる検討

前述のような立場から、「社会考慮」という概念の有用性を検討するために行った調査の概要を報告する。具体的には、①「社会を考慮すること」と「社会認識」についての尺度構成のための予備的検討、②迷惑認知と社会考慮との関係、③迷惑対処法と社会考慮との関係、について探索的に検討する。

1. 社会考慮及び社会認識に関する項目の作成

本来ならば、「社会考慮」の概念定義を明確にした上で、項目の収集を行い尺度構成の手続きをとる必要がある。しかしながら、次に述べる「社会認識」との関係が複雑であると予想されたので、ここでは「社会を考慮すること」を表す典型的な項目として次の3項目を作

成した。

- ・自分の行動がいかに社会に影響を与えているのかを考えることがある。
- ・自分が暮らす社会全体のことについて考えることがある。
- ・社会がいかに成り立っているかということについて考えることがある。

加えて、「社会考慮」と関連するであろう「社会認識」に関する項目を作成した。内容としては、社会を考慮する者の特徴として、制度的側面（法律や規則、制度的教育、政治、経済など）、对人的側面（他者との協力・連携、配慮、援助など）、一般的に考えられる社会というものに対する関心や意見の表明を含むものと、社会を考慮しない者の特徴としての自己及び身近な他者によって構成される小さな社会に対する関心と意見の表明を含むものを想定し、共同研究者8名が「社会認識」を示すと考えられる78項目を作成した。これらについて、類似した内容のものをまとめ、さらに検討し43項目を得た。

2. 調査内容

「社会的迷惑行為に関する意識調査」というタイトルの調査用紙は、①迷惑認知に関する項目、②迷惑行為に対する対処法についての質問、③社会考慮と社会認識尺度、④フェイスシート項目、の4つの内容で構成された。

①迷惑認知：安藤ら（1998）、森ら（1998）で用いた迷惑認知項目から、比較的分散が大きい項目を選び、それらに対して主成分分析を行い、より広範囲の側面を含むと考えられる28項目を選択した。安藤ら（1998）同様に、「人々に次のようなふるまいを目にしたときに、あなたはどの程度「迷惑だ」と感じるでしょうか」との教示のもとに「1. 感じない」「2. やや感じる」「3. わりに感じる」「4. かなり感じる」「5. 非常に感じる」の5段階で評定を求めた。

②迷惑対処法：迷惑行為に対する考え方として、a.規制（規則などで取り締まるなど）、b.共生（お互いに注意するなど）、c.放任（問題視しないなど）、の3つの対処法から1つを選択させた。取り上げた迷惑行為は、前述の迷惑認知項目の因子分析の結果を参考にし、広い範囲の側面を含み、対処法としてa～cの記述が可能だと判断した6項目を使用した。

③社会考慮・社会認識：前述の社会考慮に関する3項目と社会認識に関する43項目の合計46項目をランダムに配置し、「1. まったくあてはまらない」から「5. よくあてはまる」までの5段階で評定させた。

④フェイスシート項目：大学、学部、性別、年齢、居住形態、公共交通機関などの利用程度、携帯電話・ポケットベルの所有、喫煙・飲酒の嗜好の有無、などについてたずねた。

3. 調査方法

愛知県、三重県の大学生男女562名に対して、大学の講義時間を利用して集団で実施した。調査時期は1998年7月10日から7月15日。所要時間は20分から30分程度。著しく回答が不備

だった10名を除いた552名（愛知県の1大学296名、三重県の1大学191名、1短期大学55名、不明10名）のデータを得た。さらに、その後に得た社会人（愛知県T市民大学講座受講生）との比較を考慮し、24歳以下の524名を分析対象とした。

4. 結果

1) 社会考慮得点

前述の3項目の合計得点を算出し、社会考慮得点とした。分析対象者524名の平均は8.52、標準偏差2.38であり、各項目間の相関係数は0.33～0.47であった（ちなみに、 α 係数は0.64）。この平均値に基づき、8点以下を低考慮群、9点以下を高考慮群とした。低考慮群は男性134名、女性121名（計255名）、高考慮群は男性175名、女性89名（計264名）であり、高考慮群に占める女性の割合が低かった（ $\chi^2=10.163$, $p<0.001$ ）。

Table 1 迷惑認知項目の因子分析結果と社会考慮群の比較

項 目	F I	F II	低考慮群	高考慮群	差
4. 研究室の前を大声で話しながら通ること。	0.42	0.24	2.76(1.12)	3.11(1.13)	***
6. 煙の出ている吸殻を灰皿に放置すること。	0.51	0.21	3.35(1.39)	3.71(1.31)	**
7. 指定された日以外にゴミを出すこと。	0.43	0.38	2.93(1.40)	3.39(1.23)	***
12. 飲めない人にお酒をすすめること。	0.44	0.15	2.91(1.26)	3.32(1.22)	***
13. 授業参観に来て、親同士が授業とは関係なくおしゃべりしていること。	0.46	0.18	2.84(1.38)	3.01(1.37)	
14. 人混みで、歩きながらタバコを吸うこと。	0.69	-0.01	2.96(1.52)	3.42(1.45)	***
15. 何時だろうが時間を気にせず電話すること。	0.45	0.19	2.68(1.32)	2.94(1.26)	*
17. レストランなどで食事中にタバコを吸うこと。	0.68	-0.07	3.08(1.46)	3.37(1.40)	*
21. 公衆トイレに不愉快な落書きをすること。	0.45	0.32	2.65(1.29)	3.15(1.30)	***
25. 授業や講演会が始まる前に、ポケットベルのスイッチを切らないこと。	0.49	0.21	2.85(1.28)	3.46(1.30)	***
5. トイレに入っても手を洗わないこと。	0.13	0.45	2.98(1.41)	3.04(1.35)	
8. 食後にお茶でうがいして飲むこと。	0.10	0.45	3.14(1.45)	3.06(1.38)	
10. 「お一人様いくつ」の制限がある品物を、何回もならんで買い求めること。	0.17	0.43	2.38(1.28)	2.59(1.31)	
11. 混雑した電車などで、空席の前に立ったままであること。	0.11	0.41	2.70(1.42)	2.79(1.32)	
19. いいかげんな計画しか立てずに、登山をすること。	0.28	0.42	2.31(1.31)	2.58(1.32)	*
22. 車での来客が多い店舗なのに、駐車場を持たずに営業すること。	0.05	0.50	3.23(1.32)	3.21(1.35)	
23. 人混みの中で、親が泣いている子どもを叱りつけ、さらに泣かせてしまうこと。	0.14	0.42	3.13(1.34)	3.33(1.33)	
26. 電車などで、席をゆずられたお年寄りがそれを断ること。	-0.10	0.44	2.42(1.38)	2.43(1.44)	
27. 交通量の多い交差点で、親がよちよち歩きの子どもの手を歩かせること。	0.07	0.54	2.55(1.30)	2.70(1.38)	
1. 水不足のときに洗車すること。	0.15	0.18	3.05(1.39)	3.13(1.29)	
2. 街頭で宗教の勧誘活動をすること。	0.08	0.30	3.47(1.37)	3.50(1.37)	
3. セスナ機を使って空から大音量で宣伝すること。	0.11	0.25	3.25(1.29)	3.29(1.30)	
9. 事前に連絡しないで人の家を訪問すること。	0.21	0.36	2.52(1.30)	2.72(1.27)	
16. 混雑している食堂で、荷物だけを先に置いて席取りをすること。	0.38	0.02	2.29(1.34)	2.56(1.34)	*
18. 電車やバスにただ乗りすること。	0.37	0.35	2.68(1.42)	3.16(1.39)	***
20. 狭い通路ですれ違うときに、道をゆずる素振りを見せないこと。	0.21	0.37	3.51(1.16)	3.59(1.18)	
24. 夜、無灯火のままで自転車に乗ること。	0.27	0.29	2.71(1.33)	3.10(1.29)	**
28. 犬や猫を放し飼いにすること。	0.17	0.39	2.73(1.41)	2.76(1.31)	
寄 与 率	11.78	11.18			

* $p<0.05$ ** $p<0.01$ *** $p<0.001$

2) 迷惑認知項目と社会認識項目の因子分析結果

(1) 迷惑認知項目の因子分析

主因子法（バリマックス回転）を行い、2因子を抽出した（Table 1）。安藤ら（1998）の結果と比較した結果、第Ⅰ因子に高い負荷を示した10項目は、すべてが安藤ら（1998）の第Ⅰ因子に含まれており、「ルール・マナー違反行為」の因子と解釈した。第Ⅱ因子に高い負荷を示した9項目のうち3項目だけが安藤ら（1998）の第Ⅱ因子と重複した項目であったが、内容的には「周りの人との調和を乱す行為」に対応していると解釈された。

第Ⅰ因子に高い負荷を示した10項目の合計得点の平均は3.10、標準偏差は0.80、 α 係数は0.80となった。第Ⅱ因子の9項目の平均は2.81、標準偏差は0.75、 α 係数は0.71であった。

(2) 社会認識項目の因子分析

「社会考慮」に関する3項目を除いた45項目に対して、因子分析（主因子法、バリマックス回転）を行い、4因子を抽出した（Table 2）。第Ⅰ因子に高い負荷を示した項目は、「4. ひとりひとりが力を合わせることによって、もっと住みよい世の中になる」「39. ひとりひとりの人間が、他人に対して配慮すれば社会はよくなる」「20. 困っている人に手をさしのべるのは当然のことだ」といった11項目であり「他者への配慮」に関する因子と解釈した（ $M=3.80$ 、 $SD=0.52$ 、 $\alpha=0.79$ ）。

第Ⅱ因子に高い負荷を示した項目は「30. 誠意をもって接しても、それが通じない人もたくさんいる」「35. 世の中には個人の力ではどうにもならないことがたくさんある」「43. 「みんなのために」と言っている人でも、結局は自分のことしか考えていない」などの5項目で「他者に対する無効力感」に関する因子と解釈した。（ $M=3.63$ 、 $SD=0.57$ 、 $\alpha=0.59$ ）。

第Ⅲ因子は「41. 社会の秩序を維持するためには、法律や規則が最も重要である」「33. 世の中は法律や規則がきちんとしていれうまく治まる」「3. 社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくするべきだ」などの4項目で「社会的規制」の因子と解釈された（ $M=2.85$ 、 $SD=0.69$ 、 $\alpha=0.57$ ）。

第Ⅳ因子は「18. 選挙で自分の一票を投じるのは重要なことだ（逆転項目）」「14. 個人個人が変わっても、社会全体が変わるとは思えない」「36. 遠くの国で核実験が行われたからといって、騒ぎ立てることもない」などの4項目で「社会に対する無効力感」と解釈された（ $M=2.45$ 、 $SD=0.76$ 、 $\alpha=0.53$ ）。

3) 社会考慮と社会的迷惑との関連

(1) 迷惑認知得点の比較

迷惑認知得点を項目ごとに高配慮群で比較したところ、28項目中13項目で、高配慮群の方が低配慮群よりも迷惑だと感じる方向での有意な差がみられた（Table 1）。その13項目中9項目は第Ⅰ因子「ルール・マナー違反行為」に属する項目であった。「ルール・マナー違反行為」に対しては、社会を考慮する態度をもっている人ほど、迷惑だと認知する傾向がみられた。

Table 2 社会認識項目の因子分析結果

項 目	平均(SD)	F I	F II	F III	F IV
4.ひとりひとりが力を合わせることによって、もっと住みよい世の中になる。	3.99(0.97)	0.55	-0.03	0.12	-0.21
8.思いやりのある人間が増えれば、世の中はよくなる。	4.17(0.94)	0.50	0.00	0.14	-0.03
12.他人の幸福を考えることは、自分が幸福になることにつながる。	3.56(1.05)	0.51	-0.19	0.15	0.00
17.他人を犠牲にして得るような成功には何の価値もない。	3.42(1.05)	0.45	-0.12	-0.05	0.13
20.困っている人に手をさしのべるのは当然のことだ。	4.17(0.76)	0.54	0.04	0.05	-0.03
29.人は自分が暮らす社会全体のことをもっと考えるべきである。	3.86(0.78)	0.53	0.16	0.11	-0.22
32.飢えに苦しむ人々のことを思うと、食べ物に粗末にすることはできない。	3.59(0.96)	0.42	0.05	0.13	-0.08
34.犯罪の抑制には、法律や罰則の整備よりも人々の意識を高めることの方が重要だ。	3.87(0.89)	0.49	0.11	-0.17	-0.20
39.ひとりひとりの人間が、他人に対して配慮すれば社会はよくなる。	3.86(0.85)	0.54	0.07	0.12	-0.25
42.お互いが信じあうことによって、世の中は成り立っている。	3.35(0.96)	0.45	-0.17	0.12	0.02
46.身近な人々の気持ちについて考えることがある。	3.90(0.89)	0.48	0.06	-0.02	-0.10
9.世の中の大部分の人は、社会のことなど何も考えていない。	3.44(1.00)	0.04	0.41	0.08	0.17
25.今の世の中では、他人を信じているとひどい目にあう。	2.95(0.99)	-0.11	0.42	0.15	0.12
30.誠意をもって接しても、それが通じない人もたくさんいる。	4.01(0.87)	0.17	0.55	0.03	-0.08
35.世の中には個人の力ではどうにもならないことがたくさんある。	4.35(0.74)	0.25	0.51	-0.09	0.00
43.「みんなのために」と言っている人でも、結局は自分のことしか考えていない。	3.42(0.96)	-0.07	0.46	-0.04	0.16
3.社会を住みよくするためには、法律や規則をもっと厳しくするべきだ。	2.80(1.06)	0.18	0.04	0.45	-0.02
11.子どものしつけを厳しくしなければ、世の中はよくなる。	2.98(1.17)	0.13	0.15	0.42	-0.04
33.世の中は法律や規則がきちんとしていれうまく治まる。	2.71(0.95)	0.11	-0.10	0.57	0.08
41.社会の秩序を維持するためには、法律や規則が最も重要である。	2.89(0.97)	0.04	-0.01	0.57	0.07
6.環境問題などは、自分ひとりが何かをしても解決するとは思えない。	2.89(1.38)	-0.09	0.19	0.12	0.43
14.個人個人が変わっても、社会全体が変わるとは思えない。	2.50(1.09)	-0.07	0.12	0.10	0.47
18.選挙で自分の一票を投じることは重要なことだ。	3.49(1.20)	0.26	-0.04	0.19	-0.50
36.遠くの国で核実験が行われたからといって、騒ぎ立てることもない。	1.90(1.01)	-0.23	-0.08	0.12	0.44
1.新聞やテレビで報道される事件はとも他人ごととは思えない。	2.94(0.99)	0.23	-0.05	0.20	-0.21
5.今の世の中では、平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい。	3.43(1.17)	0.35	0.03	0.16	0.16
7.社会の中のルールには従うべきだ。	3.94(0.93)	0.38	0.18	0.20	-0.16
10.自分の出すゴミが、どのように処理されているのかを考えることがある。	3.00(1.19)	0.24	0.02	0.09	-0.14
13.今の社会では、他人との競争に負けると惨めな結果になる。	3.11(1.12)	0.09	0.35	0.34	0.11
15.社会全体の利益のために、個人の自由が制限されるのは仕方がない。	2.66(1.03)	0.04	-0.03	0.31	-0.05
16.他人への配慮の欠けた行動は、ルールとして決まっていなくても許されない。	4.07(0.79)	0.39	0.29	-0.02	-0.21
19.安全な社会を実現するためには、罰則を設ける必要がある。	3.68(0.91)	0.11	0.33	0.32	-0.23
21.他人のことなど考えずに、自分のことだけ考えていけばよい。	2.04(0.93)	-0.40	0.22	0.14	0.08
22.青少年の犯罪の増加は、自分には関係のない問題だ。	2.56(1.05)	-0.19	0.18	0.09	0.30
23.ひとりひとりが社会に関心をもたなければ、社会は変わらない。	4.03(0.90)	0.49	0.13	0.11	-0.36
24.政治や経済について考えるのはめんどうだ。	3.22(1.18)	0.08	0.14	-0.14	0.38
26.考え方は人それぞれなので、他人のことに口を出す必要はない。	3.14(1.01)	-0.06	0.26	0.01	0.19
27.伝統や習慣にはそれなりの意味があるので、大事にした方がよい。	3.60(0.92)	0.28	0.07	0.12	0.00
28.誰が政治家になっても、自分の生活がそう変わるとは思えない。	3.81(1.15)	0.11	0.35	-0.19	0.36
31.多くの人々にとって、地位や財産を得ることは人生最大の目標である。	3.05(1.06)	-0.11	0.33	0.35	0.13
38.世の中のルールには、自分ひとりくらい従わなくてもかまわないものも多い。	2.88(1.05)	-0.06	0.28	-0.03	0.28
40.自分の目標を達成するためには、たとえ友人でも利用すべきだ。	2.78(0.99)	-0.24	0.23	0.24	-0.06
45.交通事故を減らすためには、厳しい取締りが必要である。	3.35(0.97)	0.15	0.06	0.38	-0.01
寄 与 率		9.78	5.21	5.01	4.71

迷惑認知の因子ごとにまとめてみた場合、第Ⅰ因子の「ルール・マナー違反行為」では、低考慮群が $M=2.90$ ($SD=0.80$)、高考慮群が $M=3.29$ ($SD=0.74$) となり、有意に高考慮群の方が迷惑だと認知していた ($t(515)=5.804$, $p<0.001$)。しかしながら、第Ⅱ因子の「周りの人との調和を乱す行為」では群間に有意な差はみられなかった (低考慮群は $M=2.75$, $SD=0.74$; 高考慮群は $M=2.86$, $SD=0.75$)。

「ルール・マナー違反行為」を迷惑だと認知する程度が「社会考慮」の高い人で顕著であるという点は納得できるものである。それ以外に、「社会考慮」との関連が示された項目をみると、「16. 混雑している食堂で、荷物をだけを先において席取りをすること」「18. 電車やバスにただ乗りすること」「19. いいかげんな計画しか立てずに、登山をすること」「24. 夜、無灯火のままで自転車に乗ること」といった項目であった。

(2) 迷惑対処法の比較

対処法6項目について規制、共生、放任のそれぞれを選択した項目数を合計し、高低考慮群で比較をした (Table 3)。規制対処と共生対処においては、考慮群間に有意な差はみられなかったが、放任対処では低考慮群の方が有意にその選択を多く行っていた ($t(522)=2.13$, $p<0.05$)。

Table 3 迷惑対処法の社会考慮群による違い

	規制対処	共生対処	放任対処*
低考慮群	1.79(1.17)	2.76(1.22)	1.41(1.16)
高考慮群	1.87(1.14)	2.93(1.21)	1.20(1.07)

* $p<.05$

4) 社会考慮と諸測度との関連

社会考慮得点と迷惑認知度の2尺度得点、3つの迷惑対処得点及び社会認識の4尺度得点との相関係数を示したものがTable 4である。迷惑対処得点は三者択一形式の6項目の選択数を得点にしたものであり、相関分析は不適切であると考えられるが、探索的な意味で相関係数を算出した。

それぞれの側面内での相関は、比較的高いものとなっている。しかしながら、社会認識における「F. 他者への配慮」と「G. 他者に対する無効力感」、「G. 他者に対する無効力感」と「H. 社会的規制」、「H. 社会的規制」と「I. 社会に対する無効力感」との間には有意な相関はみられなかった。有意な相関が示された点からみると、「G. 他者に対する無効力感」を感じる人は同時に「I. 社会に対する無効力感」を示していた。また、「F. 他者への配慮」を志向する人は同時に「H. 社会的規制」も必要と感じており「I. 社会に対する無効力感」をもたないという関係が考えられる。

迷惑対処法と迷惑認知の関係をみると、「ルール・マナー違反行為」を迷惑だと認知する

Table 4 社会考慮得点と諸測定との相関関係

	平均(SD)	A	B	C	D	E	F	G	H	I
A. ルール・マナー違反	3.10(0.80)									
B. 周囲との不調和	2.81(0.75)	.393***								
C. 規制対処	1.83(1.15)	.206***	.071							
D. 共生対処	2.85(1.21)	.124**	.151**	-.536***						
E. 放任対処	1.30(1.12)	-.343***	-.240***	-.431***	-.500***					
F. 他者配慮	3.80(0.52)	.243***	.138**	-.068	.137**	-.088*				
G. 他者無効力感	3.63(0.57)	.078	.194***	.072	-.110	.040	.033			
H. 社会的規制	2.85(0.69)	.177***	.222***	.103*	-.001	-.114**	.225***	.072		
I. 社会的無効力感	2.45(0.76)	-.253***	.041	-.029	-.172***	.203***	-.295***	.170***	.028	
J. 社会考慮	8.52(2.38)	.247***	.073	.049	.057	-.106*	.367***	.021	.221***	-.246***

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

人は、放任せずに規制なり共生なりの解決をはかりたいと考えていることがうかがえる。それに対して「周りの人との調和を乱す行為」は、放任せずに共生の方向を志向しているが規制する方向とは無関係である。

社会認識と迷惑認知との関係では、どのような迷惑であれ他者に配慮することや規制社会を志向するものほど迷惑だと認知する傾向は強いようである。しかし、「ルール・マナー違反行為」を迷惑だと感じる人は「社会に対する無効力感」をあまり感じていない人であり、「周りの人との調和を乱す行為」を迷惑だと感じる人は「他者に対する無効力感」を抱いている人が多いようである。

社会認識と迷惑対処法の関連性をみると、「他者に対する配慮」や「社会的規制」といった社会認識をもつ人は、迷惑行為の放任を認めずに、それぞれ共生対処や規制対処を選択していた。「他者に対する無効力感」を抱いている人は迷惑対処法と明確な関連を示さなかったのに対して、「社会に対する無効力感」を抱いている人は共生的対処をとらずに放任するしかないと考えているようである。

最後に、今回の探索的調査の中心である社会考慮との関係をまとめておこう。迷惑認知と迷惑対処は先に平均値の比較でみたように、社会を考慮する人ほど、「ルール・マナー違反行為」に対して迷惑を認知しており、放任はしないという考え方がうかがえる。逆に考えると、「周りの人との調和を乱す行為」は個人の問題であると考えている可能性があるし、対処法としては規制や共生の両方を志向しているとも考えられる。社会認識との関連からみた場合も、社会を考慮する人は、「他者への配慮」や「規制社会」の側面と正の相関を示していることからそうした傾向を指摘することができるかもしれない。また、「他者に対する無効力感」と無相関であることは、個人よりも社会を考えている可能性があるし、「社会に対する無効力感」と負の相関を示しているのは「社会を考慮している」ことの積極性の現れとも考えられる。

5) 今後の課題

今回は社会的迷惑行為という問題を通して「社会考慮」という概念の有用性を探索的に吟

味した。その結果、ある程度の有用性は示されたと考えられる。したがって、概念をより洗練させ、堅固な尺度を構成していくことが第一の課題だと考えられる。その際に、社会を考慮する人の「周りの人との調和を乱す行為」に対する迷惑認知、「他者に対する無効力感」といった社会認識との関連性をどのように考えるかが問題となるであろう。こうした「個人・他者」と関わる側面を除いた「社会」に限定するのか、それとも対人的側面に対する志向性も加えて吟味していくのかは重要な問題となるであろう。

こうした概念的定義及び測定尺度を洗練させながら、社会を考慮している人の属性・特性を明らかにすることや、社会を考慮している人の社会認識の多様性を明らかにするといったことも必要となってくるであろう。そして、将来的には、「社会考慮」を視野に入れた教育的関与の可能性を考えることも大きな問題として考えていきたい。

引用文献

- 安藤直樹・斎藤和志・藤田達雄・北折充隆・吉田俊和 1998 社会的迷惑に関する研究(1) ——認知された迷惑度の分析—— 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 236-237.
- 森久美子・廣岡秀一・石田靖彦・元吉忠寛・吉田俊和 1998 社会的迷惑に関する研究(2) ——迷惑度の自己認知と他者認知に関する分析—— 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 238-239.
- 山岸俊男 1990 社会的ジレンマのしくみ——「自分1人ぐらいの心理」の招くもの—— サイエンス社
- 吉田俊和 1998 社会的迷惑行為を考える——多様なアプローチを探る—— 日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会発表論文集, 11.

注)本稿は日本グループ・ダイナミクス学会第46回大会のワークショップ「社会的迷惑行為を考える——多様なアプローチを探る——」において話題提供者であった筆者の配付した資料に加筆修正したものである。また、本研究は、吉田俊和(名古屋大学)、藤田達雄(名古屋短期大学)、廣岡秀一(三重大学)、森久美子(愛知淑徳短期大学)、安藤直樹、石田靖彦、北折充隆、元吉忠寛(名古屋大学大学院)と筆者で行われている。